







一生トライしよう。







SHIZUOKA BLUEREVS RECRUITING BOOK













生しよう。

静岡ブルーレヴズはリーグワン初のプロクラブだ。

企業からの予算だけで運営されるのではなく、クラブとして独立し成長を目指す。 ヤマハ発動機時代からの財産を引き継ぎ、最高峰にチャレンジする。

最高峰にチャレンジすることを、

無理だと言われても、無茶だと言われても、私たちは挑む。

必ず成し遂げてみせる。トライし続ける者にしか、世界は変えられないから。

日本一の山を背負う静岡で

世界に SHIZUOKA SHOCK を刻んだ静岡で

夢を描き、奇跡を信じ、伝説の幕を開ける。

私たちと一緒にトライしないか。

今はまだ、日本一ではない。

今はまだ、世界から知られてもいない。

だからこそ、今しかない。

物語が始まる今、伝説を創る一員にならないか。

チームに入ることがゴールじゃない。引退することがピリオドじゃない。

人生を賭けて挑戦し続けることを選んだはずだ。

静岡ブルーレヴズなら一生トライできる。

フィールドの中で日本一を、フィールドの外で世界一を。

プレイヤーとして。社会人として。人間として。

一生トライしよう。

SHIZUOKA

SHIZUOKA

SHIZUOKA

SHIZUOKA



独自のスタイルで挑戦する 静岡ブルーレヴズ。

日本一になりたい。高校2年の時は花園に行けたけれど、3年の時は行けなかった。9連覇を果たした大学でプレーしたけれど、4年の時は準決勝で負けた。自分の力が足りなかった。悔しかった。悔しくて悔しくて、たまらなかった。このまま終わってたまるか。自分の力で、日本一を勝ち取りたい。そう思って、次のステージで自分が戦うチームを探した。正直に言って、いわゆるトップファイブと呼ばれるような強豪チームでプレーしたいと思っていた。その方が、日本一に近いと思ったから。

ただ、いろいろなチームを実際に見学させてもらう中で、静岡ブルーレヴズが強く印象に残った。他のチームよりも日本人選手が多く、独自のラグビースタイルを追求している。常に角度をつけて走り、スペースを活用する。当時主流だったラグビーとは真逆のようなラグビーで、日本一を目指そうとする、その在り方が面白いと思った。完成品の一部になるのではなく、今はないものを、新たに生み出そうとする。大いなる挑戦の一員にな

りたいと思った。

また、チームだけでなく会社も見学させてもらう中で、社員一人ひとりからの応援、会社としての熱い応援を感じた。伝統的に培われた、会社や地域からのラグビー愛。ラグビー愛に満ちたこの場所で、しばらく遠ざかっている日本一を目指す。その物語に魅力を感じた。当時は五郎丸さんが引退を発表していなかったけれど、同じポジションとして当然意識はした。いつか自分が15番をつけて、チームの中心に立つ。強いチームに入るのではなくて、強いチームを創る。そのために静岡ブルーレヴズを選んだ。

成長のためには、 試合に出ること。 そのチャンスは全員にある。

入団してから感じるのは、結束力の強さ。静岡 ブルーレヴズは、人と人とのつながりを大切にして、 思いを一つにできるチーム。何かテーマを決めた ら、全員で一丸になって遂行できる。それは間違 いなく、静岡ブルーレヴズの強みだ。「日本一を 目指す」という思いは、誰一人ぶれていない。試合や練習が終われば本当に仲がいいチームではあるけれど、日本一という共通の目標があるからこそ、 馴れ合いではなく高い基準を求め合う。そのメリ ハリがある雰囲気が、自分には合っていると思う。

そして静岡ブルーレヴズでは、全員にチャンスがある。日本人であろうと、外国人であろうと、 関係ない。これまで何をしてきたのかではなくて、 今チームのために何ができるかが問われ、相応しい選手が試合に出る。ラグビーは他のスポーツと 比べて試合数が限られている。野球は約140試合、 サッカーは約40試合、ラグビーには16試合しかない。だからこそ、試合に出る機会を得ることは、 成長のために何よりも大事だと、自分は思う。

静岡ブルーレヴズが日本一に辿り着くためには、まだ足りない。チーム力も、何より自分の力も。だからこそ、新しいラグビーを追求する静岡ブルーレヴズで自分を磨き、日本代表になって、日本一になる。ラグビーへの情熱に溢れたこの場所で、互いを高め合えるチームメイトとともに、必ず日本一を勝ち取ってみせる。

やってやる。 這い上がって強豪チームを 倒してみせる。

中学では県大会4位。進学した高校には、県選抜出身の選手ばかり。自分にそんな実績はなかった。だからこそ「やってやる」という気持ちに火がついた。大学2年の時に、同じポジションには強力なライバルがいて、スタメンで試合に出られる機会は少なかった。このままではトップリーグから声がかかることはないだろう。高校の時以上に、闘志に火がついた。自分の全てをラグビーに注いで、練習に励んだ。大学3年の時の大学選手権、スタメンで試合に出場した自分は、過去最高のパフォーマンスを発揮できた。全く無名だった自分に届いた7~8のクラブからのオファー、ジュニアジャパンへの選出。「やってやる」という炎を燃やし続けた先に、大きなターニングポイントへと辿り着くことができた。

ジュニアジャパンの後に選ばれた日本代表の時 に、当時日本代表のコーチを務めていた堀川さん と出会った。堀川さんの指導に触れる中で、一つ 一つのプレーに気付きを得ることができた。そして、堀川さんが率いる静岡ブルーレヴズに興味を持った。五郎丸さんや矢富さんというスター選手だけではなく、言わば無名から這い上がった選手たちで構成されたチーム。強豪チームに入るよりも、強豪チームを倒すために、チームと一緒に成長したいと思って、静岡ブルーレヴズを選んだ。選んだ理由はもう一つ。昔から自然が好きで、山・川・海の豊かな静岡は自分にとって最高の環境だった。静岡に訪れた時に感じた「ここ、最高だ!」という直感を信じて決めた。

やってやる。 40歳まで、やってやる。

静岡ブルーレヴズに入団して自分が変化したことがある。それは、「なぜラグビーをするのか」という理由が増えたこと。磐田の街を歩けば、街の人が声をかけてくれる。ヤマハ発動機で仕事をする中で、同僚の人たちが心から応援してくれる。試合をしている時でも、ファンの人たちの声援が確かにはっきりと聞こえる。都会に比べれば、小さな街。けれど、だからこそ、ファンの人たちと

の距離は近く、応援は熱くてあたたかい。それまでの自分を突き動かしてきた「やってやる」という闘志は、ライバルや自分に向いていた。静岡ブルーレヴズに来てから、「ファンのために」という最高のモチベーションが生まれた。

自分のプレーが、静岡ブルーレヴズの勝利が、ファンの勇気になる。格上の相手にひるむことなく立ち向かう。最後の最後まで決して諦めずに戦い抜く。「ありがとう」「自分も明日から頑張ります」という言葉がスタンドから届く。はっきりと聞こえる。試合が終わってボロボロになった体で、毎週山奥の川に行く。川に浸かってリカバリーしながら、ファンの人たちからの声を思い出し、静岡ブルーレヴズでラグビーをやっていてよかったと、心から思う。

目標は、40歳までラグビーをすること。激しくタックルをするプレースタイルを貫きながらでも、年を重ねてもプレーできることを、ファンの皆さんにみてもらいたい。「自分も頑張ろう」と一人でも多くの人に思ってもらえたら、自分がラグビーをやっていた意味が生まれる。やってやる。40歳まで、やってやる。





トライアウト入団から フランス TOP14、 静岡から世界へ。

小学校の時、将来の夢を聞かれて「ラグビー選手」と書いた。体が小さくても、ラグビーが好きで、ずっとラグビーを続けてきた。高校でも大学でも目立った活躍ができたわけでもないけれど、心の底からラグビーが好きで、トップレベルのラグビー選手になる夢を追い続けた。3分間のアピール動画を送って、掴んだトライアウトというチャンス。死にものぐるいで鍛えてきた足腰で駆け抜けた50メートルの先に、「トップレベルのラグビー選手」という夢があった。

「トップレベルのラグビー選手」になるという夢を叶えたけれど、もちろんそれはゴールではない。ヤマハ発動機に入ったからこそ、自分は次の夢に向かって挑戦できたと思う。ラグビーだけじゃなく、仕事にも本気で向き合う文化。美しい海や山に囲まれた環境で育まれるチームの絆。あたたかいファンの皆さんからの応援。その全てがラグビー選手としてだけでなく、人間としての自分を成長させてくれた。

2016年に初めて選ばれた日本代表。2019年ワールドカップの舞台に立つことはできなかったけれど、ちょうどそのタイミングでフランスのトゥールーズとプロ契約を結ぶことになった。五郎丸さんに続き日本人で2人目、FWとしては初めてのTOP14でのプロ契約。95%以上がホームの観客で埋め尽くされたスタジアムから届く大歓声。街を歩けば、パン屋から、花屋から、レストランからの応援の声。「街の誇り」として存在するクラブの一員として、プレーできる喜び。あの経験は忘れられない。ヤマハ発動機に流れる「静岡から世界へ」という文化が、自分のフランスへの挑戦を間違いなく後押ししてくれたと思う。

静岡ブルーレヴズの ラグビーでスタジアムを 満員にしてみせる。

トゥールーズは、南フランスにある人口50万人にも満たない小さな街。その小さな街にあるラグビーチームを取り巻く、世界最高峰の熱狂。静岡ブルーレヴズが、プロチームとしてどうあるべきか、日本のラグビーが、プロスポーツとしてどうあるべきか、一人の選手としても本当に勉強に

なった。小さな街であることは、ハンディキャップではない。むしろ、ファンとの距離が近いことが、熱狂を生むアドバンテージになる。

リーグワンの試合でスタジアムを満員にできる チームは、まだない。自分は、ヤマハスタジアム を、エコパスタジアムを満員にしたい。満員のス タジアムで静岡ブルーレヴズらしい全力のラグビ ーをして、ファンの皆さんとともに勝利の喜びを 分かち合いたい。いつの日かきっと、静岡ブルー レヴズを「街の誇り」にしたい。「日本一のクラブ」 という栄光を、街の人達に届けたい。世界中のク ラブが憧れるような熱狂を、静岡につくりだしたい。 それは遥か遠い夢ではなくて、実現可能な目標だ。

何者でもなかった自分が静岡に来て、ヤマハに、ブルーレヴズに育ててもらった。選手一人ひとりの成長に本気でコミットしてくれるチームだから、挑戦を後押ししてくれるクラブだから、静岡だから、自分はずっと夢を追い続けてこれた。これからも、静岡で夢を追い続けたい。2023年ワールドカップフランス大会は、トゥールーズで日本代表の試合が開催される。もう一度あの場所に立って、大歓声を背にプレーするという夢を。

もっと強くなりたい。 だからこそ 静岡ブルーレヴズに。

2015年9月19日。日本代表が南アフリカ代表を倒した。世界中が衝撃を受けたあの勝利は、秋田でラグビーをしていた高校生だった自分を奮い立たせた。まぎれもなく世界トップのフィジカルに、日本代表が立ち向かい、打ち倒す。試合前には世界中の人が「不可能」だと思っていたことを、「可能」にした。あの試合を観た多くの人と同じように、自分も「日本人でもやれるんだ」という勇気をもらった。それ以上に、「やるんだ」という決意が心の底から湧き上がってきた。ラグビーをやるからには、「やれるんだ」という勇気をもらうだけじゃいけない。不可能を可能にすることに、挑戦すると決めた。やるんだ。

早稲田大学3年の時にベスト4、4年の時に優勝を経験することができた。素晴らしい経験をさせてもらったけれど、「優勝メンバー」として自分自身が胸を張れるかというと、そうではない。他の突出したメンバーの活躍によって、辿り着けた

優勝。自分にはまだまだ足りないものがある。もっと上手くなりたい。もっと速くなりたい。何よりも、もっと強くなりたい。そのために、自分が行くべき場所はどこか。そう思って、チームを探した。大学ラグビーとは違い、自分と同じロックというポジションには、体の大きな外国人選手が多く起用されている。その中で静岡ブルーレヴズは異彩を放っていた。

フィジカルとスピードと運動量。 トップレベルを上回ることは 不可能ではない。

他チームの外国人選手に立ち向かう日本人のロック。異様なまでにセットプレーにこだわり、8 人が一体となって有機的に動くフォワード。フィジカルだけでなく、スピードと運動量を駆使することで、相手を押し込んでいく。静岡ブルーレヴズが貫く、そのスタイルに惹かれた。自分はどんな選手になりたいのか、どうやって相手と、世界と戦っていくのか。その答えを、静岡ブルーレヴズで見つけてみせると思って、入団を決めた。前シーズン、試合に出る機会を得て、トップレベル の選手とぶつかる中で、自分に足りないものを知った。試合に出る中で「これではスタメンで試合に出られない」と、自分で体感することは、悔しい。心の底から悔しい。けれど、その差を埋めるためにやるべきことは明確になった。外国人選手に負けないフィジカルをつくってはじめて、ようやくスタートラインに立てる。より素早く、更に圧倒的な運動量を身に付けることができれば、戦うことができる。今は大きな差だとしても、決して不可能ではない。試合に出たからこそ気付ける差があって、差に気付けたからこそ、やるべきことが見えた。差があるから不可能だと諦めるのではなく、差に気付けたからこそ可能性が生まれたのだ。

改めて、自分自身の挑戦の場として静岡ブルーレヴズを選んでよかったと思う。練習が終わった後のトレーニングルームはいつも熱気に満ちているし、先輩たちは自分たちの技術を惜しみなく伝えてくれる。挑戦を笑うような人は一人もいない。ここにいる全員が、不可能を可能にすることに挑む、挑戦者だから。まずは自分の前を進む、先輩たちの大きな背中をひたむきに追いかけて、追い越してみせる





チーム存続の危機からの復活、 ブルーレヴズに流れる挑戦の DNA。

ありがたいことに、高校に入る時も、大学に入る時も、プロになる時も、複数のオファーを頂き、自分には選択肢があった。選択をする時に、正解や不正解という分かりやすい基準があるわけではない。誰も正解を教えてはくれない。自分で決断する。決断するということは、1つに決めて、他の全ての選択肢を断つということ。だからこそ、人生の岐路に立つ時、いつも時間をかけてじっくり考えた。自分がやりたいことは何か、成し遂げたいことは何か。振り返ればいつも、歴史を創るための挑戦を選んできた。自分で決める。決めた後は、選択を正解にするために、全力を尽くす。自分で決めるという覚悟が、挑戦し続ける自分の鑑さなって、支えてくれる。

当時まだ優勝をしたことがなかったヤマハ発動 機に決めたのは、チームとともに成長して優勝し てみせるという決意があったから。どうすればも っと成長できるか、どうすればもっとチームに貢 献できるか、必死になって自分たちのラグビーをつくりあげようとしていた。そんな中、2009年にチームに激震が走った。リーマンショックの影響による、チーム存続の危機。自分の力ではどうしようもない現実に直面した。何とか存続は決まったものの、36名になってしまったチーム。チームを離れる選択肢もあった。それでも、残ることを決めた。ヤマハで優勝をする。そう決めて入団した選択を、正解にするために。応援してくれる人たちに支えられ、必死になって自分たちのスタイルを模索し、確立し、自信を掴み、勝利する。チームはまるで一つの生き物のように、体中に血が通い、変化していった。チームは瀕死の状態から生まれ変わり、悲願の初優勝を掴み取った。ヤマハの初優勝は、確かにラグビー界に歴史を刻んだ。

選手自身が心から 愛せるクラブを。

プロとして15年。年数以上の回数の手術をしてきた。後悔はしていない。振り返ったところで、怪我をしたプレーの前に戻れるわけじゃない。大怪我をするたびに、振り返らずに立ち上がってすぐに前を

向いたからこそ、今まで続けてこられたのだと思う。 チームの中では最年長になって、これから先の選手 人生も後悔することなくやりきると決めている。静 岡ブルーレヴズがプロクラブとして新たな出発をし た今、自分の役割は「愛されるクラブ」を創ること だと思う。静岡の人たち、ファンの人たちから「愛 される」ために、まずは選手がこのクラブを心の底 から「愛せる」ように、力を尽くしたい。ブルーレ ヴズの選手たちは、本当に仲がいい。こんなに仲が いいチーム、他にないんじゃないかと思う。でもそ れだけでは足りない。仲がいいという信頼を土台にし、 高いレベルを互いに求め合って、僕らはもっともっ といいチームを創る。

静岡ブルーレヴズは、今また大きな岐路に立っている。ラグビー界が変わろうとしているその先端で、プロクラブとしての挑戦の真っ只中にいる。「静岡から世界へ」という大きなビジョンが、口だけだったのか、新しい歴史のスタートだったのか。それを決めるのは、これからの自分たち次第。静岡ブルーレヴズで共に戦ってきた仲間と、そしてこれから入ってくる仲間とともに、必ず新しい歴史を刻んでみせる。

世界最高峰のセットプレーを 完成させてみせる

大学4年の時、たまたまヤマハ発動機の練習に参 加する機会があった。自分よりも大きなロックのパ ワーに圧倒されて、このままではトップリーグでは 通用しない、と痛感した。ヤマハ発動機に入団して、 フィジカルを鍛え直す。でも外国人選手と同じこと をしているだけでは追いつかない。自分が他の選手 との差をつくれるとしたら、運動量とスキル。当時 の監督やコーチも、新たなロック像を自分に期待し てくれていたと思う。自分がスタメンに選ばれる理 由をつくるために、毎日毎日、徹底的に練習をした。 そして勝ち取ったスタメン。大学4年の時には、大 学の中でもスタメンに入れなかった自分が、トップ リーグの試合にスタメンで出る。ヤマハ発動機という、 チャンスを与えて育てるという文化のチームに入っ ていなければ、今自分がこうやって試合に出ること はできなかったかもしれない。

試合に出ると、対戦相手は強豪チームの有名選手 たちばかり。練習ではなく、真剣勝負の場でぶつ かる一瞬一瞬が、成長するための機会になる。試合 に出るチャンスがあり、手強い相手に挑戦するチャ ンスがある。どうすれば次はもっといいプレーができるか、一緒になって考えてくれる監督・コーチ・仲間がいる。だから、静岡ブルーレヴズは人が育つチームなのだと思う。もう一つは、セットプレーへのこだわり。リーグの中でも体が小さい自分たちが、体の大きな相手を倒すためには、セットプレーでは絶対に負けられない。これは、日本のリーグだけに限ったことではなく、日本が世界と戦う上でも最も大切なことだと思う。世界最高峰へと辿り着くための可能性、それはセットプレーにあって、静岡ブルーレヴズはどのチームよりもセットプレーにこだわっているという自負がある。チームとしての特徴、静岡ブルーレヴズらしさと持つこと、そしてそれが世界と戦う武器になるという自信と誇りが、選手の成長につながっている。

想いを背負って グラウンドに立つ、 ラグビー選手としての幸せ。

2022年のシーズンを終え、結果には全く満足していない。シーズンを通じて、惜しい敗戦が続いた。ただ、間違いなくチームは成長している。キャプテンとして、断言できる。強豪チーム相手

に、フォワードが粘って粘って、バックスがトライしてくれるシーンが増えた。静岡らしいスタイルを創り上げていくプロセスの中で、レヴズスタイルが確かな形になってきた。そして、静岡ブルーレヴズというプロクラブになったことで、特にホームゲームの盛り上がりは格段に変化をした。

試合前、ハーフタイム、試合後、全てにおいてファンの皆さんがスタジアムに訪れる一日を楽しめるような様々な企画を、運営の人たちが本気で考えてくれている。グラウンドに立つ自分たちには、去年まで以上の熱気で、ファンの皆さんの声援が届く。試合後には、五郎丸さんが会場を片付ける姿もあった。これだけたくさんの人に支えられて、最高のファンに応援してもらって、最高の舞台でラグビーができている。

静岡ブルーレヴズには伸びしろしかない。たくさんの勝利を届けられていないことが、心から悔しい。だからこそ、全ての想いをプレーに込めて、グラウンドでレヴズスタイルを表現してみせる。その先にある勝利こそが、恩返しであり、新しいラグビーの証明になるはずだから。





スーパーラグビー、 オールブラックス、 そして静岡へ。

私とヤマハ発動機との出会いは2004年でした。 当時私は、スーパーラグビーのクルセイダーズでプレーしていました。現在静岡ブルーレヴズの監督を務める堀川さんが、当時コーチとしてのスキルアップのためにクルセイダーズの練習を見学に来ていました。その時堀川さんから「ヤマハでプレーしてみないか」と声をかけられたことから、日本でプレーする気持ちが生まれ始めました。クルセイダーズは当時から強豪で、私自身たくさんのことをクルセイダーズというチームから学びました。また、オールブラックスに選出されていた時期でもありました。ただ、私自身が「新たな挑戦」を必要としていました。それは「自分」に対する挑戦です。今よりももっと成長する。そのためには変化が必要だと感じ、日本でプレーすることを決断しました。

ヤマハ発動機以外にも、日本の他のチームから も声をかけてもらいましたが、最後の決め手になったのは、実は静岡の海でした。私にとって、ハ ードワークをすることと同じぐらい、リラックスをすることが重要です。海に近い街にあるチームなら、思う存分リラックスをして大好きなサーフィンが楽しめると思って、ヤマハ発動機に決めました。2009年に静岡に来て以来、もう10年以上この街で家族と暮らしています。チームメイトだけでなく、チームの関係者、街の人達とつくりあげてきた絆が、選手を引退した今も続いています。静岡は素敵な人と出会うことができ、美しい海がある、私のホームタウンです。

ラグビーで得たことを、 人生に繋げられるように。

私がニュージーランドで学んだことと、ヤマハ 発動機、静岡ブルーレヴズが大切にしている文化 には共通点があります。「ハードワークをするこ と」「決して諦めないこと」「リスペクトの気持ち を持つこと」「良い人間であること」の4つです。 スーパーラグビーでも、国を代表する大会でも、 強いチームからはこの文化がはっきりと表現され ます。「なぜこのチームでプレーするのか」「何を 目指すのか」ということを一人ひとりがしっかり と考えること、そしてそれを行動で示すことが互いへの理解とリスペクトに繋がり、強いチームがつくられていくのです。私は静岡ブルーレヴズのコーチとして、この文化をつくることに貢献したい。また私は外国人でもあるので、特に外国人選手と日本人選手が互いに高め合い、リスペクトし合うチームづくりに貢献したいと考えています。

ラグビーに長く関わる中で、改めてこれまでに出会った「素晴らしい選手」とは、「素晴らしい選手」である前に「素晴らしい人」であったと感じます。周囲からリスペクトされるような行動を実践する「素晴らしい人」は、必ず「素晴らしい選手」へと成長します。ブルーレヴズには、選手としてだけでなく人としてリスペクトし合える仲間が集まっています。私の役割は、もちろん優勝するために私がサポートできるすべてのことに尽力すること。そして、静岡ブルーレヴズで共に戦う仲間が、「素晴らしい人」へと成長するサポートをすることです。ラグビー選手を引退しても、人生は続きます。静岡ブルーレヴズの仲間が、ラグビーで得たことを人生へと繋げられるようにすることが、私の大切な役割です。

ラグビーも、仕事も、全力で。 社員・選手としての かけがえのない経験。

大学時代はチームの中でレギュラーでもなかった 自分が、ヤマハ発動機で主将を務め、日本代表にも 入れたのは、ヤマハ発動機というチームに成長させ てもらったおかげです。自分だけでなく、他にも多 くの選手が、ヤマハ発動機というチームに入ってか ら成長し、これまでに何人も日本代表に選出されて きました。選手が成長する土壌、それは「やりたい ことを発信すれば全力でサポートしてくれる」とい うヤマハらしさが根底にあると思います。

4年目で主将を任された時は正直驚きましたが、 若手の自分にチャンスを与えてくれたチームの期 待に応えたいという一心で、仲間とともに創部以 来初めての関西社会人リーグ優勝を果たすことが できました。オールブラックスを経験した仲間か ら、「チームとはファミリーだ」と学びました。心 の底から信頼し合う。その上で、何でも言い合う。 仲間に遠慮をして、言いたいことを飲み込んでい たら、チームは強くなれない。仲間をリスペクトし、 心を通わせ、ファミリーとして結束する。そんな ヤマハらしさは、今もブルーレヴズに引き継がれ ていると思います。

選手を引退した後は、コーチを経験し、その後は社員としてヤマハ発動機で働くことを選びました。選手時代から仕事をしていて、職場の上司も仲間も、みんな本当にあたたかく応援してくれていました。また、選手時代から仕事をしていたことで、ラグビー選手としても社会人としても成長できたと思いますし、引退後の仕事において本当に役に立ったと実感しています。ラグビー選手としても、人間としても、成長させてくれたヤマハに、今度は仕事を通じて恩返しをしたい。そんな気持ちで、引退後のキャリアをスタートしました。

海外駐在を経て、 再びラグビーへ。 意志ある者を 応援してくれる文化。

仕事においても、やりたいことを発信すれば全 力でサポートしてくれるのが、ヤマハです。海外 で仕事をしたいということを会社に伝える中で、 調達の部署で働くことになり、約4年間ブラジル に駐在しました。ラグビー選手としてヤマハ発動 機に入社しましたが、基幹職、いわゆる課長とい う役職にも就くことができました。ラグビー選手 を引退したら終わり、ではなく、それから先もヤマハ発動機の社員として、期待し続けてくれたおかげです。

海外での仕事を経験した後は、かねてからもう 一度ラグビーに携わりたいと考えていて、現在は 静岡ブルーレヴズの育成普及チームスタッフとヤマハ発動機スポーツ推進グループにて地域渉外を 担当しています。普及活動の一環として、中学生 に直接ラグビーを教える機会もあるのですが、本当に面白い仕事です。子どもたちがラグビーの楽しさに気付き、1日ごと、1時間ごとに成長をしていく。いつかこの子どもたちが、高校・大学を経て、ブルーレヴズの選手として戻ってくるかもしれない。そんな夢を見ています。

選手を引退し、コーチを経験し、ヤマハ発動機で社員として働き、今は静岡ブルーレヴズを世界ーのクラブにするという挑戦をしています。改めて、自分のキャリアを通じてかけがえのない経験ができていると思います。それは、意志ある者の挑戦を支えてくれる、ヤマハだからこそ、静岡ブルーレヴズだからこそ築けたキャリアだと、心から思います。ラグビーの未来を創るために、これからも挑戦し続けたいと思います。





誰かの成功の跡を辿るのでは なく、自らの手で新たな歴史を。

私は大学時代、4年間の中で2回しか負けない という強いチームでプレーすることができました。 もちろん勝利を得ることに喜びを感じていました が、黄金期のチームの一員ということで、恵まれ すぎていた面もあったと思います。だんだんと勝 つことが当たり前になり、勝利の喜びという感覚 が薄れていった時期もありました。次のステージ では、挑戦して勝つということの喜び、チームと 一緒に成長しながら優勝するという喜びを味わい たいと思い、ヤマハ発動機を選びました。当時は ヤマハ発動機は日本一を獲得した経験がなかった のですが、選手のポテンシャルやチームの育成戦 略や文化を知っていく中で、ヤマハには大きな可 能性があると感じて、入団を決めました。他の選 手よりも、入団を決めるのは早かったと思います。 自分の道は、自分で決める。それは昔から今も変 わりません。

入団してから、リーマンショックによるチーム存 続の危機など、苦難の連続でした。しかし、仲間 とともに困難を乗り越えて、2015年の日本選手権でクラブ初の優勝を勝ち取りました。あの時の喜びは、これからも忘れることはないでしょう。一人ひとりが意志を持ってヤマハ発動機を選んで入団してきたメンバーであり、危機の中でもチームに残ることを選んだメンバーでした。そしてコーチ、スタッフ、ファンの皆様、全ての人達とともに、自分たちで新たな歴史を創ることができました。

誰かの成功の跡を辿るのではなく、新しいことに 挑戦して自分で切り拓く。それが自分らしいやり方 だと思っていますし、ヤマハ発動機だからこそそれ が実現できたとも思います。フランスのTOP14にも、 当時は誰も行ったことがありませんでした。過去の 常識をものさしにして成功するかどうか測ることに、 私は意味を感じません。挑戦してみなければわから ないし、成功かどうかは他の誰でもなく、自分自身 が決めるものだと思っています。

静岡ブルーレヴズで、 ラグビー界に新たな歴史を刻む。

私は静岡ブルーレヴズでCRO(クラブ・リレー

ションズ・オフィサー)として新しい挑戦を始めました。リーグがプロ化し、ホストゲームの興行権が各クラブに移りました。ヤマハ発動機は静岡ブルーレヴズとして生まれ変わり、リーグワンの中で最も早くプロクラブとしての活動を開始しました。ラグビー界が変わろうとしている、静岡ブルーレヴズが先陣を切って挑戦を始める。大学生の時にヤマハ発動機を選んだと同じように、静岡ブルーレヴズに大きな可能性を感じ、自分自身もここで新たな挑戦をすることを決めました。

私たちの進む先には、誰もやったことのない挑戦しかありません。だからこそ、やる意味があります。選手、コーチ、そして私たちチーム関係者全員が力を尽くし、静岡ブルーレヴズを日本一強く、日本一愛されるチームへと成長させることができれば、ラグビー界に新たな歴史を創ることができます。選手というキャリアを終え、今度はスポーツビジネスという新しい領域で自分もチームとともに成長し、ラグビーが持つ無限の可能性を解き放つ。静岡から世界へと、一生トライし続けます。

引退はピリオドではなく スタートライン

全身全霊をかけてタックルする。すぐに立ち上がって次に自分がやるべきことを探す。繋いだボールが、仲間の手によって相手ゴールに運ばれ、懸命に走る自分の目線の遠い先でトライが生まれる。自分の仕事がトライまでのストーリーの手前にあろうとも、全員でトライを喜び合う。ラグビーの根本にある「利他」の魂を、全員で表現できたときに生まれるトライ。トライを生み出すチームの一体感。それを味わうことが、私がラグビーを続けてきた理由です。そしてそれは、私がヤマハ発動機で仕事を続ける理由でもあります。

選手としてヤマハ発動機を選んだのは、ラグビーに没頭できる環境を求めたからです。前職時代は会社のラグビー部ではなく、クラブチームでプレーをしていました。ラグビーを続けたい、更に上のレベルでラグビーをしたい、と思っていた自分にとって、「初めての日本一を本気で目指す」という当時のヤマハ発動機は、最高の環境でした。ちょうど今のブルーレヴズと似た状況だったと思います。2000年からヤマハでプレーをし、

2003年には関西リーグ全勝優勝を経験することができました。私はレギュラーではありませんでしたが、一体感を持った最高のチームでした。全員が心を一つにし、自己犠牲を厭わず、一人ひとりが自分の強みを活かし、チームのために全力を尽くす。最高のチームを経験し、私は2004年にフィールドから去ることを決めました。フィールドを去るときにまたいだタッチラインは、ピリオドではなく、新しい挑戦へと向かうスタートラインでした。

グラウンドから世界へと 舞台を変えて挑戦する

私にとっての新しい挑戦は「世界」でした。子 どものころ父が海外駐在をしていたことへの憧れ、 高校時代に経験した交換留学、ラグビーを通じて 出会った国籍のチームメイトと築いた信頼関係、 様々なこれらの要素が私を「世界で挑戦する」こ とに掻き立ててくれました。そして売上の大半が 海外で構成されるヤマハ発動機は、自分にとって 最高の舞台でもありました。当時からヤマハ発動 機には、ラグビーを引退して社員として活躍する 先輩が大勢いました。いわゆる部署の上司だけで なく、ラグビーの先輩が仕事を教えてくれました。 海外での仕事は日本よりもやはり最初は不安なこ とも多かったですが、世界のどこにいってもラグ ビーOBがいて、力になってくれました。

ラグビーを引退してから18年経ちますが、そ の間にイタリア、ブラジル、インド、そして現在 の台湾での駐在を経験しています。出張で訪れた 国は数え切れません。周りの人に恵まれて得られ た機会だと思いますが、その土台にはヤマハ発動 機の「挑戦を支える文化」があることは確かです。 そして、どの国で仕事をしていても、私が目指す のは「最高のチーム」を創ることです。ラグビー 時代の80分という時間が、例えば2~3年という 期間に変わる中で、一人ひとりが全力を尽くし、 互いをリスペクトし、パスを繋いでトライを目指 す。ラグビーで学んだことの全てが、私の今の仕 事に活かされています。私たち台湾のチームから のパスがヨーロッパの街を走るモーターサイクル へと繋がっていく。それをチーム全員で喜び合え ることに、私は喜びと誇りを感じています。ラグ ビーをしていた時と同じように、私は一生トライ し続けます。



選手採用データ

採用形態

①新卒採用 正社員採用。ヤマハ発動機株式会社の社員として社業に取り 本社 (静岡県磐田市) 及び周辺事務所及びヤマハ発動機関係会社出向もある。 組みながら、静岡ブルーレヴズに選手として所属。新人研修後、 ※現役引退後は、本人の希望も踏まえて応相談

一般部署へ配属。

②業務委託 一般的なプロ選手契約。静岡ブルーレヴズと直接業務委託契 約を締結し、プロ選手として活動する。契約金額等は経験、 能力等を考慮し、決定。

給与/諸手当

正社員採用の場合はヤマハ発動機株式会社の給与テーブルに準ずる。

待遇/賞与

昇給年1回 (4月) /賞与年2回 (6月·12月)

諸手当も同様。加えて、ラグビー手当、出場給あり。

勤務地

勤務時間

6月:終日勤務 オフシーズン

オンシーズン (前半) 7月~10月:10時~15時 オンシーズン (開幕直前) 11月~12月:9時~12時

1月~5月:9時~12時、14時~17時を基本として 们唯進方公

曜日によって変動

保険

雇用保険、労災保険、健康保険、

厚生年金保険、スポーツ障害保険

静岡ブルーレヴズ 株式会社 会社概要

(2022年5月末現在)

2021年6月22日

1億円 資本金

ヤマハ発動機株式会社

(100%)

代表取締役社長 山谷 拓志

> 従業員数 31名

革新と情熱で、心躍る最高 の感動をつくりだす

ビジョン

ミッション

静岡から世界を魅了する、 日本一のプロフェッショナル ラグビークラブをつくる

中長期目標

our Value Partner () MUFG 世界が進むチカラに

①RWC2023直後のシー ズン、2023年-24年シ ーズンで飛躍すること

②2032年までに売上40 億円を達成し、事業規模 で世界一のプロフェッショ ナルラグビークラブとなる 25

東京・名古屋 大阪からも のアクセス 近い! 120分

105分 60分

名古屋

大阪

周辺案内図

豊田寮

磐田駅

磐田駅までのアクセス 東京駅より約 105 分 大阪駅より約 120 分 名古屋駅より約60分 ※富士山静岡空港まではタクシー等を 利用すると約1時間程度でアクセス可

東京

寮・グラウンド 職場、全てが

ヤマハスタジアム 東名高速道路 エコパスタジアム ヤマハ発動機本社 サポート環境

多くの時間を過ごすことになる大久保グラウンド、豊田寮には、アスリートとしてのパフォーマンスを維持、 向上させるためのトレーニング、食事、睡眠、グラウンドなどの環境が高いレベルで整備されています。静岡ブルーレヴズは、 選手のパフォーマンス向上にむけて、あらゆる面からサポートします。

大久保グラウンド・クラブハウス



• 質の高い天然芝の素晴らしいグラウンドを有しています。



• 人工芝の室内練習場とスクラム練習場をグラウンド隣に完備しています。



• チーム全員が入れる広いミーティングルームが、グラウンドに隣接し ています。



● チーム専属のトレーナーが、充実した設備の治療室で練習・試合前後



• 大浴場とアイスバスを完備し、交代浴による体のケアを行います。



• クラブハウスでも豊田寮でも、栄養学に基づいた食事が提供されています。

豊田寮



• 豊田寮には、トレーニング施設が併設されているため、いつでもトレーニ ングができる環境です。

コンディションへのサポート



• 快適な睡眠のため、選手全員にマニフレックスの寝具が支給されて

